

リベラル・アーツ教育としての 質的調査教育

— 国際基督教大学「質的社会学分析」での
実践を事例に —

中野 佑一 *
川口 遼 **

I. はじめに

2003年、日本社会学会など3つの学会が社会調査士認定機構（現・社会調査協会）を設置し、2004年から社会調査士資格の認定を始めた。⁽¹⁾ 社会調査士とは「調査企画から報告書作成までの社会調査の全過程を学習することにより、基本的な調査方法や分析手法の妥当性、またその問題点を指摘すること」⁽²⁾ ができる人材を指す。この資格のための標準カリキュラムが設けられることで、社会調査教育に関する教員間の情報交換が容易になり、教育の質も向上したといわれている。⁽³⁾ 他方で、標準カリキュラムのほとんどが社会調査の技法に関する科目に占められていることやその科目数の多さへの批判もある。^{(4) (5)} これは、社会学理論の科目などを通じて社会的な考え方を十分に教えることなく、調査技法を教えることへの懸念である。こうした批判が出てくるのは、社会調査実習においては、学生が社会的な考え方を身につけつつ、社会調査を実践していくことが求められているからである。

このような議論を踏まえ、本稿では、私たちがティーチングアシスタント（TA）を勤める国際基督教大学の質的調査実習「質的社会学分析」での経験をもとに、よりよい社会調査教育のあり方を検討する。教員が調査テーマを設定する調査実習と異なり、「質的社会学分析I」と「同II」（以下、一括して「質的社会学分析」）は受講生自身が調査テーマを設定する、教育と研究が分離した授業モデルを採用してきた。⁽⁶⁾ これは学生の自主性を重んじるリベラル・アーツ教育の理念と軌を一にしている。本稿は教育と研究が分離した授業モデルが社会調査教育としての教育効果をあげることを示す。また、本稿はこれまであまり取り上げられてこなかった小規模大学での質的調

* 上智大学大学院博士後期課程，国際基督教大学・武蔵大学・山梨県立大学・東京成徳大学非常勤講師、国際基督教大学教養学部ティーチングアシスタント

** 一橋大学大学院博士課程，国際基督教大学教養学部ティーチングアシスタント

査実習のあり方について論じるものでもある。⁽⁷⁾ なお、国際基督教大学は所定の授業を開講できないため、2014年現在、社会調査士資格制度には参加していない。

II 社会調査教育とリベラル・アーツ教育

本章ではまず、社会調査士資格のカリキュラムにおける調査実習の位置づけを紹介し、調査実習の教育効果を先行研究にもとづいて確認する。そして、調査実習においては調査技法の体得だけでなく、社会学的想像力の涵養が必要であることを指摘し、そのためには受講生が自主的に調査テーマを設定する授業モデルが有効であることを示す。最後に、社会学的想像力とリベラル・アーツ教育の共通性を指摘し、調査実習においては受講生の自発性を育むリベラル・アーツ的な教育方法が必要であることを主張する。

1. 調査実習の現状

社会調査士資格の標準カリキュラムは、「社会調査の基本的事項に関する科目 (A)」「調査設計と実施方法に関する科目 (B)」「基本的な資料とデータの分析に関する科目 (C)」「社会調査に必要な統計学に関する科目 (D)」「量的データ解析の方法に関する科目 (E)」「質的な分析の方法に関する科目 (F)」「社会調査の実習を中心とする科目 (G)」の7科目からなる。選択必修であるEとFを含め6科目14単位を取得することで資格が認定される。

この中で教員の課題となるのがG科目の調査実習である。講義形式で行われるA～F科目は教科書が発売されたり⁽⁸⁾、授業モデルが設定されたりと比較的授業内容の標準化が図られやすい。⁽⁹⁾ 一方、G科目は、教員が調査テーマを設定することが多いものの⁽¹⁰⁾、その内容は授業ごとに大きく異なる。⁽¹¹⁾ そのため、社会調査協会発行の『社会と調査』での事例報告を中心に、実習授業のあり方について様々な議論がなされている。

2. 調査実習における教育効果

前節で示したように調査実習は社会調査士資格の中でも重要な位置を占めている。本節ではよりよい調査実習のあり方を検討するために、調査実習の教育効果について論じた先行研究についてみていくことにする。教育効果の議論に入る前に、中山伸樹が論じた教育目標の2分類について言及しておきたい。中山は教育の成果を可視化す

るためには、授業の理念や目的・目標を明確にして、その到達度を評価する必要があるとする。⁽¹²⁾ 中山は Charles A. Goldsmit と Everett K. Wilson (1990) を参照しながら、教育目標には特定の科目の内容に関係する目標（以下、科目目標）と他の研究分野と共有する目標（以下、共有目標）の2つがあると指摘する。⁽¹³⁾ 本稿では教育効果をこれらの教育目標が達成された度合いを表す概念として扱う。調査実習の教育効果について論じられた文献を整理すると、科目目標に相当するものとしては調査プロセスの理解が、他分野との共有目標に相当するものとしては社会性を身につけることが指摘されている。以下で具体的に確認していく。

(1) 調査プロセスの理解

まず、調査プロセスの理解について説明する。受講生は一連の調査プロセスを経験することで、社会調査の知識と技法を身につける。この点について大村好久は調査実習において「調査過程自体に仕組まれる（ママ）さまざまな手立て、やり方、そしてその考え方を、体験したこののちは（ママ）自己自身の力量によって自ら進められるように身につけていく」と論じる。⁽¹⁴⁾ 調査実習には、社会調査の数々のステップが手立て、やり方、考え方として仕組まれている。受講生はこのステップを順に踏んでいくことで、「自己自身の力量によって自ら（調査を）進められるように」なる。社会調査士資格で調査実習が必修になっているのは、科目目標として調査プロセスの理解という教育効果を期待しているからである。⁽¹⁵⁾

(2) 社会性とコミュニケーション能力

調査実習は、同質的な友人とのつきあいではなく、異質な他者とのコミュニケーションの機会となる。まず、西城戸誠は調査実習がその学生の社会性を育むとともに、コミュニケーション能力を高めるものであるとする。⁽¹⁶⁾ また、河口充勇は、調査実習を通じて、学生が不安感・緊張感から出会い・発見の感動、協力者への感謝、責任感の獲得、主体性の確立という軌跡を経てきたことを、“社会人一步手前”の学生にとって、「予期的社会化」の軌跡としてとらえている。⁽¹⁷⁾ 一方、小城英子は調査実習で得られる問題を掘り起こし、必要な情報を集め、データを多面的に読み解き、論理的な結論を導くといった思考力、グループワークや建設的な議論を進めるコミュニケーション能力は社会人としての仕事力と同義であるとし、その能力は就職活動でも役立つものであるとする。⁽¹⁸⁾ さらに、本田由紀も調査実習が論理的思考やチームワー

クなどを含む濃密な学習の場となっているとしている。⁽¹⁹⁾ こうした社会性とコミュニケーション能力の向上が、調査実習がもっている他分野との共有目標である教育効果である。

3. 社会学的想像力と教育と研究が分離した授業モデル

本節では調査実習には前節で指摘した2点以外に社会学的想像力の涵養が求められること、そのためには受講生が自ら調査テーマを決定する教育と研究が分離した授業モデルを採用することが有効であることを示していく。

社会調査士制度は創設以来、19122人⁽²⁰⁾の社会調査士を輩出するなど大きな成果をあげてきたが、同時に本制度にはいくつかの懸念も示されてきた。⁽²¹⁾中でも重要なのが片桐新自による「社会調査の解析技術ばかりでなく、もっと本質的な社会学的仮説を立てられる能力が高まらないと、実際には十分な調査はできない」⁽²²⁾との批判であろう。片桐が指摘するように、標準カリキュラムでは、量的データの分析方法、質的データの分析方法など、社会調査の技法に焦点があてられている。さらに、江原由美子は標準カリキュラムすべてを開講することによって、「本質的な社会学的仮説」を立てるために必要な社会学理論の授業数が減っていると報告している⁽²³⁾。

この「本質的な社会学的仮説を立てる能力」とは、C. Wright Millsのいう社会学的想像力である。なぜなら、社会調査においては個別具体的な現象をより一般的で抽象的な社会構造と関連させて理解することが肝要であるからであり、それゆえ調査実習は『「仮説」をもとに社会理論と社会的現実を架橋することで『社会学的想像力』を涵養するという役割』⁽²⁴⁾を担っている。

Millsの定義によると社会学的想像力とは「情報を駆使し理性を発展させることによって、かれら自身（引用者注：自分自身）の内部や世界におこることがらを、明晰に総括できるような精神的な資質」である。⁽²⁵⁾この「かれら自身の内部や世界におこることがらを明晰に総括する」という行為をAnthony Giddensは「みずからの毎日の生活を新たな目で見直すために、そうした毎日の生活の当たり前のことがらから『離脱して、自分自身について考える』こと」⁽²⁶⁾とまとめなおしている。社会調査とは社会現象（「かれら自身の内部や世界におこることがら」あるいは「みずからの毎日の生活」）を私たちが生活している社会の仕組み（「毎日の生活の当たり前のことがら」）と関連づけて理解する（「明晰に総括する」あるいは「新たな目で見直す」）ことといえよう。

受講生が自ら「本質的な社会学的仮説」を立てられるようにするためには、社会的想像力を涵養するための調査実習を行う必要がある。「はじめに」でも触れたように調査実習には、西澤晃彦によれば、教員が調査テーマを設定する授業方法である「教育と研究が一体化したモデル」（以下、一体化モデル）と、受講生自身が調査テーマを設定する授業方法である「教育と研究が分離したモデル」（以下、分離モデル）とがある。⁽²⁷⁾ 社会調査協会は調査実習の内容の事前報告を担当教員に求めており、一体化モデルの採用を推奨していると考えられる。⁽²⁸⁾ ⁽²⁹⁾ 中山伸樹は、これは事実上、教員が調査テーマを決定することを意味しているが、受講生自身が調査テーマを設定するほうが得るものが多いとして批判する。⁽³⁰⁾ また、西澤は、自身は一体化モデルを採用していることや一体化モデルにおいても質の高い社会調査教育ができることを指摘しつつ、社会調査士認定機構が分離モデルに抑止的だったことの意図せざる結果として、大学生を対象に教室を利用して調査を行うコースが増加しているとする。⁽³¹⁾ その結果、「学生たちは、調査を体験しているというよりは、タスクをこなして単位をとる感覚で授業に参加するようになる」⁽³²⁾ という。西澤はこのような状況を社会調査の墮落と呼ぶ。⁽³³⁾ 墮落によって失われているものは「本質的な社会学的仮説を立てられる能力」であり社会的想像力であろう。調査や分析の方法に関する知識や技術を習得することは、社会調査教育においてきわめて重要である。しかし、社会調査が個別具体的な現象を社会的に理解することの重要性を踏まえるならば、社会的想像力もまた調査実習を通じてその涵養が図られるべきだといえるだろう。

4. 社会的想像力とリベラル・アーツ教育

本節では、前節で示した社会的想像力とリベラル・アーツ教育の自己反省能力を育むことを目指しているという共通性を指摘し、調査実習においては受講生の自発性を育むリベラル・アーツ的な教育方法が望まれることを主張する。

リベラル・アーツ教育とは、鈴木典比古によれば「人間がよりよく生きていくために必要とされる知性と知識及びそれらを自ら探求しようとする思考力・技量・行動力を身に付け、責任ある市民になるための教育」⁽³⁴⁾ である。また、中山によればリベラル・アーツ教育は「観察や調査によってリアリティを把握し、読み、書き、批判的に考え、討論するという認識能力、思考能力、言語表現能力、コミュニケーション能力、自分の学んだことを自分の足元や内部に反射させる反省能力」の涵養を目的とする。⁽³⁵⁾ ここで言及される観察や調査に根差した自己反省能力は社会調査における社

会学的想像力に相当する。これはMills自身が社会学的想像力について論じる中で、社会学を「解放的教育 [liberating education]」と呼んでいることから裏付けられるだろう⁽³⁶⁾。

これらの能力は学生達の自主的、主体的な取り組みを通じて培われるものである。例えば、Millsは、解放的教育としての社会学の目的は「自己教育的・自己創造的な人間の形成、すなわち合理的な個人の形成にほかならない」⁽³⁷⁾と論じる。この「自己教育的・自己創造的な人間」とは、自分自身を教育、創造することに積極的な人間像である。それに対し、日比谷潤子はリベラル・アーツ教育を実践する立場から、学生の自発性・主体性を育むことを主眼とする能動的な教育プログラムの重要性を説いている。⁽³⁸⁾ 市川伸一もまた、リベラル・アーツ教育においては、対話を通じて学生のもっている可能性を引き出し、育てることが重要であるとする。⁽³⁹⁾

このような議論を踏まえると調査実習においては対話型の授業によって、学生の自発性を育むことが重要となることがわかる。石橋渉が指摘するように、学生は調査対象者とのコミュニケーションなど調査の様々な段階で困難を抱える。⁽⁴⁰⁾ 教員が付き添うことができない以上、学生は起こりうる様々な問題に自分自身で対応する必要がある。調査実習では教員が調査技法を教えるだけではなく、受講生の自発性を引き出すような教育方法をとることが必要となる。「質的社会学分析」では一体化モデルよりも分離モデルのほうが調査実習に適していると考え、分離モデルを採用してきた。分離モデルには大きく2つの課題がある。ひとつは受講生の自主的な取り組みをどのように引き出すのかという課題である。もうひとつは受講生が各々調査を行うことによって授業運営コストがかかるという課題である。⁽⁴¹⁾ 次章では、これらの課題を乗り越えるために、「質的社会学分析」で採用している授業運営方法について論じる。

Ⅲ．「質的社会学分析」の概要

国際基督教大学（以下、本学）は3学期制やメジャー制度を採用するといった独自の教育体制をとっており、「質的社会学分析」（以下、本授業）もこの制度にもとづき運営されている。ここでは、本学の教育体制と本授業の概要について簡潔に説明したうえで、本授業の運営方法について論じる。また、学生の自主性を尊重しながら調査実習を効率的に運営するための工夫について論じる。

1. 国際基督教大学の教育制度と「質的社会学分析」の基礎情報

まず、本学の教育体制と本授業の基礎情報について説明する。本学は入学後に自らのメジャーを選択するという制度を採用しており、学生は2年次の後半に31の分野から自らのメジャー（専攻）を選択する。また、3学期制（1学期あたり約10週間の授業期間）を採用しており、1時限の授業時間は70分である。つまり70分授業を10回受講することで1単位が認定される。

本授業は社会学メジャーに位置づけられており、社会学と社会調査の基礎科目を履修し終えた3、4年生に向けて開講されている。春学期（4月初旬～6月中旬）に「質的社会学分析I」、秋学期（9月初旬～11月中旬）に「質的社会学分析II」を開講しており、両者の内容は連続している。例年30～40名の受講生を教員1名とTA3名が指導する。専任のTAの指導のもと、調査テーマの設定から論文執筆まで全ての調査プロセスをグループで行う。各TAあたり3グループを担当するのが常である。週1回の授業日に3時限210分を連続して開講しており、単位数はそれぞれ3単位である。

次に本授業の授業内容とスケジュールについて示す。本授業は教員による調査法の講義、教員とTAがアドバイスをするファシリテーション、グループワーク、調査内容を授業内で発表するプレゼンテーションからなる。授業では、3時限のうち、前半を講義にあて、後半をグループワークとプレゼンテーションにあてる。本授業のスケジュールは5つのモジュールにもとづいている。図1と2はそれらを示したものである。「①発想を理解しよう」では質的調査の特性、先行研究レビューの重要性、分析課題を扱う。「②インタビューの準備をしよう」では依頼状や質問リストの作成を通じて研究課題を明確にして、予備調査を実施し、調査計画書を作成する。また、ここでは調査倫理についても扱う。「③インタビューをしよう」ではインタビュー調査を行い、データを収集する。「④『語り』を分析しよう」では作成したトランスクリプションをもとにコーディングを行い、分析を進め、研究課題に対する答えを明確にする。「⑤論文にまとめよう」では分析結果にもとづき、論文を執筆する。

図1:「質的社会学分析」の5つのモジュール

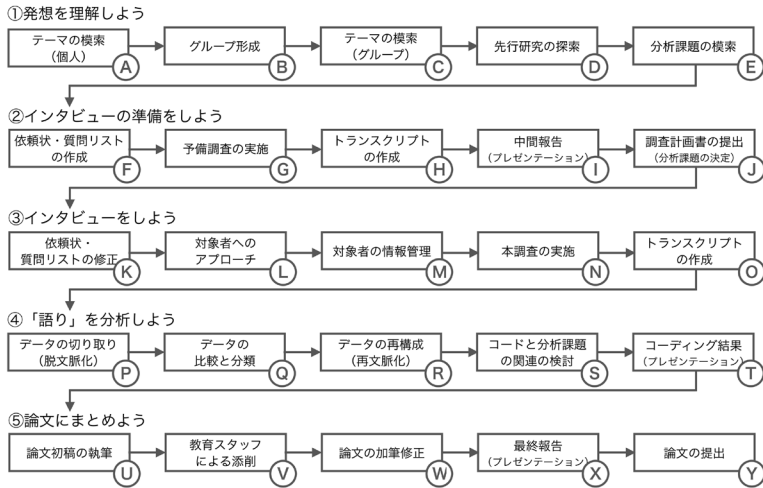


図2:「質的 sociology 分析」の授業のスケジュール

「質的 sociology 分析Ⅰ」(春学期)

回	講義	実習
①	1 クラスの概要、質的調査の概要	自己紹介、テーマの模索(個人)Ⓐ
	2 先行研究レビュー	グループ形成Ⓑ テーマの模索(グループ)Ⓒ 先行研究の探索Ⓓ
	3 調査研究の流れ、データとは何か 調査対象と分析課題の設定	分析課題の模索Ⓔ 先行研究リストの作成
②	4 インタビュー、参与観察 依頼状・質問リスト	依頼状・質問リストの作成Ⓕ
	5 フィールドに向かう準備 予備調査	予備調査の開始Ⓖ
	6 データを生成すること	トランスクリプトの作成Ⓖ
	7 研究調査倫理	中間報告用レジュメの作成
	8 調査計画書	調査計画書の執筆
	9 中間報告Ⅰ(グループでのプレゼンテーション)Ⓘ	
	10 中間報告Ⅱ(グループでのプレゼンテーション)Ⓙ	調査計画書の提出Ⓙ

「質的 sociology 分析Ⅱ」(秋学期)

回	講義	実習
③	1 クラスの概要、調査計画書の講評	依頼状・質問リストの修正Ⓚ
	2 質的データの分析法	対象者へのアプローチⓁ 対象者の情報管理Ⓜ 本調査の実施Ⓝ トランスクリプションの作成Ⓞ
④	3 コーディング(データの切り取りと比較)	コーディング(脱文脈化)Ⓟ コーディング(比較/分類)Ⓠ
	4 コーディング(データの再構成)	コーディング(再文脈化)Ⓠ
⑤	5 データの分析から解釈へ	コーディングと分析課題の関連Ⓡ
	6 コーディング結果の発表Ⓡ	論文初稿の執筆Ⓢ
⑤	7 研究成果のとりまとめ	論文執筆(スタッフの添削)Ⓣ
	8 論文スタイル	論文の加筆修正Ⓢ 最終報告レジュメの作成
⑤	9 最終報告Ⅰ(グループでのプレゼンテーション)Ⓢ	
	10 最終報告Ⅱ(グループでのプレゼンテーション)Ⓣ	論文の提出Ⓣ

2. 「質的 sociology 分析」の授業運営

本授業は教育と研究が分離した授業モデルを採用している。この授業モデルには受講生の自発的な取り組みが求められ、なおかつ運営コストが高いという課題がある。また、質的調査は量的調査と比べ、調査の手続きがフォーマライズされていない。こうした課題を乗り越えるため、本授業ではTAの活用とフォーマット化による授業運営の効率化という2つの方法をとる。

まず、TAの活用について説明する。TAは授業の事前準備だけでなく、調査実習の

スムーズな運営に深く関わっている。具体的には調査のための書類の作成、調査手続きの説明、調査の管理などの事務的な業務に加え、担当するグループの調査のファシリテーションも行う。教員がすべてのグループに対して広くアドバイスを送るのに対して、TAは担当するグループのメンバーと議論して、調査の方向性について共に考える。対話を通じて受講生が自ら答えにたどり着けるようサポートすることがTAの重要な役割である。何か問題がある場合は逐一、教員とTAで共有して今後の方策について話し合う。円滑な授業運営のためにはこうした教員とTAの連携体制が必要となる。このようにTAが調査実習を運営する上で必要な作業を担うことで、教員の負担を軽減している。教員だけでは教育と研究が分離した授業モデルの調査実習を運営することは難しい。

次に、フォーマット化による授業運営の効率化について説明する。本授業ではモジュールを設定することで授業のフォーマット化をはかっている。その他のメリットとして、ここでは受講生に出す課題の意味づけと質的調査に共通する部分のマニュアル化について述べたい。まず、受講生に出す課題であるが、春学期は調査の各プロセスに応じた10種類の課題⁽⁴²⁾が設定されている。各々の課題は調査のステップと連動しているため、受講生は課題をこなすことで調査のステップを順に踏んでいくことができる。課題の目的を明確化し、調査プロセス全体を見通せるようにすることで、受講生に自発的に学修させることが可能となる。また、教員およびTAにとっては各グループの課題の進捗状況によって、調査の進み具合を把握しやすくなる。そして、質的調査に共通する部分のマニュアル化であるが、対象者に調査の依頼を行うための正式文書である依頼状の作成手続きや録音データの書き起こしのためのトランスクリプション・ルール、学術的な論文としての執筆ルールを定めたスタイルガイドなど汎用性の高い書類⁽⁴³⁾を作成しておくことで、受講生が調査を実施しやすくなるための仕組みを構築する。教員やTAにとっては毎年、調査実習を一から組み立てる必要がないため、各グループの個別具体的なアドバイスにより多くの時間を費やせるようになる。

Ⅳ. 「質的社会学分析」の学習目標と教育効果

本章では、本授業の学習目標を示した後、2012年度の「質的社会学分析Ⅱ」の授業終了後に実施した受講生への質問紙調査⁽⁴⁴⁾をもとに、本授業の教育効果をリベラル・アーツ教育の観点から確認する。

1. 「質的社会学分析」における学習目標

本授業では①質的な調査法の基礎知識の習得、調査の実践、論文の執筆を通して、質的調査の技法を学ぶこと、②社会調査の実践に求められる論理的思考法を習得し、人々が持つさまざまな考え方の奥にある意識や価値観についてクリティカルに考察する力を身につけること、③グループワークを通して、課題を協同で遂行する作法を学ぶこと、④インタビュー調査の実践を通して、人の話を聴く力と状況を観察する力を養うこと、⑤授業でのディスカッション、口頭発表、レポート、論文作成を通して、コミュニケーション能力を高めること、⑥他の学生の発表などに対し建設的な批判をおこない、学び合いの機会に積極的に参加すること、を学習目標として挙げている。

以上の学習目標をあえて分類すれば、科目目標にあたるのは①と②であり、残りは共有目標にあたる。科目目標と共有目標は決して相互排他的なものではなく、相互に絡み合いながら授業全体の学習目標を構成している。次節以降では、本授業の教育効果を先行研究であげられていた「調査プロセスの理解」、「社会性とコミュニケーション能力」、そしてリベラル・アーツ教育との共通性がみられた「社会学的想像力」の3点から分析する。

2. 「質的社会学分析」の教育効果① 調査プロセスの理解

まず、調査プロセスの理解であるが、それを実践的に理解することや、先行研究レビューの重要性を理解すること、論理的な思考力と表現力を身につけることの3点から分析を進めていく。

(1) 調査プロセスの実践的な理解

本授業では、テーマ設定から論文執筆まで社会調査の一連のプロセスを実際に経験する。これを通じて受講生は調査研究の方法を体得することとなる。この点について、A（以下、アルファベットは受講生の仮称）は調査の具体的なプロセスを学ぶことができ、研究自体への考え方が変わったとし、自分の興味にもとづいてリサーチクエスチョンを決めたほうがいいということ、社会学の成果がとても地道なステップの繰り返しであることに気づけたと回答する。Aは授業を通じて社会調査についての知識を身につけたといえる。また、Bは社会学についてよくわかっていない状態であったが、「データを収集し、まとめあげる難しさを体感すると同時に、自分の予想を超えた発見をする機会にも恵まれ、非常に面白かった」と回答する。この「自分の予想を超え

た発見」という表現は、それまで持っていた考えが調査実習を通じて変わったことを示している。

(2) 先行研究レビューの重要性の理解

受講生は、調査プロセスを経験することで、各段階における作業内容をバラバラに理解するだけでなく、社会調査全体における各段階の位置づけを理解する。中でも強調されるのが先行研究レビューの重要性である。Cは、先行研究を数多く読み込み、それらに依拠することの大切さを知ったと回答する。それは今までのレポートのためのリサーチの何倍も大変であったという。Dは「今まで先行研究は面倒くさいと感じていたのですが、これがないと私たちの研究は何一つ証明できないのだと思うようになりました」という表現で、先行研究の大変さとその重要性について回答する。ここでは先行研究の積み重ねが現在の社会学を形作していることが指摘されている。CもDも調査実習を通じて先行研究レビューの重要性を理解したといえる。

その一方で、Eは先行研究に書かれていることに固執してしまうことの問題性を次のように指摘している。Eは「社会学はすでに用意された理論がたくさんあり、それらを先行研究として見ていくとどうしても固執してしまいがちになるので、必ず定期的リサーチクエスチョンに立ち返る姿勢、また全体の論理性を確認する姿勢が重要なのだと再認識しました」と回答する。Eは先行研究に依拠しながらも自らの問いを追求することの重要性を指摘している。これは受講生自らが調査テーマを設定していることの効果といえよう。

(3) 論理的な思考力と表現力

本授業では、調査分析の結果を学術論文の形式でまとめることを課題としている。調査にもとづくオリジナルな議論を論文としてまとめるという経験は受講生にとって大きな意義をもつ。Fは本授業で論文を書いたことが卒業論文を執筆する際に生きるだろうと述べている。Fは先行研究、データの集め方、分析の全てが卒業論文の執筆に生かせるとして、「むしろこの授業を取ってなかったら卒論書けないんじゃないかと思います」と回答する。実際、社会学メジャーの学生の多くが卒業論文の執筆にあたって社会調査を行っており、調査実習での経験が大きく役立っている。

さらに、論文を執筆する経験は学業面以外の面でも教育効果を持つ。Gは「論文の書き方、論理的に文章を組み立てて書くということはどの分野の授業を受講しても応

用できることであるし、学業以外にも活かせる能力であると思う」と回答する。また、Hは「論文の書き方はどれだけ自分の意見をわかりやすく見せられるか（ママ）ということだと思うので、自分の意見を表明したりまとめる時にそれも活かそう」と回答する。両者が指摘するように、自らの意見を論理的に表明することは学問領域に留まらず、社会の至るところで求められる。調査実習を通じて論文を執筆することで、受講生は調査プロセスを深く理解し、論理的な思考力や文章力を身につけることができる。

以上のように本授業を通して、受講生は質的調査のプロセスについての知識と各段階での作業スキルを体得する。その理解のあり方はただ知識や技術を身につけるだけでなく、先行研究との格闘の重要性の理解、社会学的な論文作成能力などを伴うものである。また、それらの能力は広く社会生活一般においても生きるものである。

3. 「質的社会学分析」の教育効果② 社会性とコミュニケーション能力

次に、2つ目の教育効果として社会性とコミュニケーション能力が涵養されることを確認する。これらは社会の一員として責任ある人間を育てることを目的とするリベラル・アーツ教育においても重要なものである。

(1) 他者とのコミュニケーションにおけるスキル

インタビュー調査を通じて、受講生は様々な対象者と出会う。受講生は社会学が現実の社会を対象とした学問であることを改めて思い知るとともに、そのような人々とのコミュニケーションについて考えることになる。ここでは、対象者とのコミュニケーションを通じて得られたものと、対象者だけでなくグループメンバーや教員、TAを含めた他者とのコミュニケーション、すなわち調査プロセス全体を通じて得られたものに分けてみていくことにする。

まず、対象者とのコミュニケーションを通じて得られたものについてみていこう。Iは依頼状、名刺、お礼状などの作成を通じて、対象者への誠意の表し方を学べたことの意義を実感している。その上で、「あまり目上の人とコンタクトを取る機会は今まで多くなかったので、これから他の場面でも活用できると思います」と回答する。また、Jは「インタビューで相手の話をしっかりきくことで相手のことを調べてから話を聞くことなどコミュニケーションの力がもの見方、考え方は今後も活かせる気がしています（ママ）」と回答する。ここでは異なる立場の人々と関わる際のマナー

を学んだことが共通して語られている。彼らは調査経験を通じて、自分とは異なる人々から成り立つ社会のあり方やその中での身の処し方について学んだといえよう。

次に、調査プロセス全体の中で得られたものについてみていこう。Kは、ひとつひとつのことばを人はどのような意図で用いているのか、それぞれ認識の仕方は異なるとし、「ことばをそのまま受け止めてしまわない力は身についたように思います」と回答する。Kは他者が使うことばの意味を斟酌することを体験的に学習している。受講生は事務的なことから、社会的な概念の定義やデータ解釈の妥当性といった研究上のことまであらゆることをグループで話し合う。また、受講生が調査を遂行するためには、教員やTAを納得させなければならない。Kの回答はこのような経験から出た言葉であると考えられる。また、Lは「他人の意見が全く自分の視点とは異なり、理解するのに時間がかかることも多いが、自分が見落としていった点を指摘してくれたりと絶対に聞くべきであることに気づけたことがよかった」と回答する。こうした経験は自分の考えを他者に論理立てて伝える訓練や立場の異なる人と関係性を築く訓練にもなるだろう。調査対象者をはじめとする様々な人との関わりで培われたコミュニケーション能力もまた重要な教育効果である。

(2) 他者とのグループワーク

受講生はグループメンバーとの協同作業によって、コミュニケーション能力を向上させる。Mは授業中に発表やグループディスカッションがあったことで、煮つまっているところが解消できたことが多々あったとしたうえで、「自分の論文を書くとき誰かの前で発表したり、意見を交換、そして進めていきたいと思いました」と回答する。グループワークには意見の違いをまとめたり、調整したり、さまざまな困難がつきまとう。メンバーと協同することで個人作業では得られない成果が獲得できるのである。また、Nはディスカッションを建設的にすることが課題とした上で、「他の人の意見に対する反応の仕方、反対する意見の言い方などその場を盛り下げず、よりよい方向に進むよう考える力がついた気がする」と回答する。Nはグループワークを通じて相手を尊重しながら自らの意見を主張する技術に気がついている。受講生が他者と協力することの意義を学んだこともまた教育効果だといえるだろう。

本授業を通じて、受講生はコミュニケーションや協同作業に必要な能力を身につける。伊奈正人と中村好孝はMillsについて論じる中で「社会調査を学ぶ場合も、調査の技術だけではなく、実施の礼儀作法から始まって、『調査ゴロ』などといわれない

ための調査の心構えまで、多くの精神教育が行われるだろう」⁽⁴⁵⁾と述べているが、本項で確認した教育効果はまさにこのようなものである。

4. 「質的社会学分析」の教育効果③ 社会学的想像力

最後に、3つ目の教育効果として社会学的想像力の涵養を確認する。社会学的想像力は、専門的な学問領域としての社会学において、特に調査研究において重要となる力である。同時にリベラル・アーツ教育の教育目標とも共通性がある。

(1) 「社会的なもの」のリアリティ

調査実習の経験をとおして、受講生はこれまで座学で学んできた社会学と現実社会をはじめて統合させる。そのことによって、多様で異質な人々から成り立つ社会の存在、いわば「社会的なもの」のリアリティを理解しだすようになる。例えば、Oは、「実際に生の情報を聞くことは本当に新鮮でそのデータがどのような社会的背景のもとに成り立っているのか、どのように社会に影響しているのか考えることは、とてもやりがいのあることでした」と回答し、社会学や社会調査の魅力や意義を認識することができたとする。調査を通じて学問と社会のつながりを感じ、そこに社会学の面白みを見いだすという経験は実習授業の強みである。また、Pは「社会学が机上の学習だけに完結せず、実際に外へ出て人間と関わり、自分でデータを収集する実証的な学問であることを改めて実感した」とし、自分の肌で理論と社会との関連を実感できることは魅力的だとしている。ここでPは実際外へ出てデータを収集することで、理論と社会の関連を実感したと語っている。これは冒頭に調査実習の課題として示した、社会調査教育と社会理論教育の接続の可能性を表している。

(2) 自己や社会を批判的に捉え返す

リベラル・アーツ教育と社会学的想像力においては共に、自己と社会を反省的に捉え返す能力が重要である。受講生の回答にはそうした能力についても言及されている。Qは「現場での実証的なこと、理論的なことをシンクロさせて考えてみるようになりました」とし、「その場のことだけを考えていたら解決できないことも、一歩引いた視点で見ることで解決の糸口が見つかったりするかもしれない…(ママ)と思います」と回答する。また、Rは本授業の中で、日常生活を批判的に読み解く力が身につけられたとし、「インタビューの分析やグループワークなど、相手の言ったことが本当に

そうなのか？と考える機会が多くあり、批判的に物事をみることができました」と回答する。Qのいう「一步引いた視点」から「その場のことだけを考えていたら解決できないこと」を解決すること、そしてRが述べる日常生活を批判的に読み解く力は「個人的状況の直接性から自由に離脱して、ものごとをもっと広い脈略のなかでとらえられる」能力、つまり社会学的想像力でもある。

この教育効果は授業開始当初の受講生の様子から比較するとその大きさがわかる。西澤は授業開始直後の学生は消費者であること以外の自己を想像することができないと報告する⁽⁴⁶⁾。同様の問題は本授業でも確認できる。例えば、当初、受講生は社会学的というよりも自らが不思議に感じる社会現象や社会集団についての素朴な疑問を調査テーマとして立てる。そして、そうした現象にはその担い手の心理的な条件を根拠とする説明がなされることが多い。これは、社会調査教育が社会理論教育と切り離されて行われることを懸念した「社会的なもの」のリアリティの喪失という問題とも関わる。⁽⁴⁷⁾ 受講生が調査テーマを設定し、調査し、論文を執筆することは、調査の対象とする人々や現象のリアリティを、より抽象的な社会理論と関連づけて理解する試みでもある。

V. おわりに

本稿は、よりよい調査実習のあり方として教育と研究が分離した授業モデルの可能性を検討した。まず、先行研究から調査実習の教育効果として調査プロセスの理解および社会性とコミュニケーション能力の向上について論じた。次に、現行の社会調査教育において指摘されている社会学理論と社会調査教育とのかわりに対する懸念を紹介し、調査実習には社会学的想像力の涵養が必要だということを示した。そこで必要となるのは、受講生が自ら調査テーマを立てる教育と研究の分離モデルを用いることである。こうした自発的な学びのあり方はリベラル・アーツ教育と共通しており、自己反省的な能力を育むという点においても社会学的想像力に近いものである。そこで、「質的社会学分析」での教育実践をもとに、分離モデルの教育効果を検討した。その結果、調査プロセスの理解、社会性とコミュニケーション能力の向上、社会学的想像力の涵養という科目目標と共有目標が絡み合った教育効果があることを明示した。

この科目目標と共有目標の絡み合いという点について、Millsは社会学教育について論じる中で「技術と価値とかが、『中立的技術』という考え方においてしばしば想定されているように、簡単に分離してしまえるものとは思わない」⁽⁴⁸⁾ とする。これ

を本稿の議論に適用すると、ここでいう技術は専門教育たる社会調査についての知識や技法にあたり、価値とはリベラル・アーツ教育によって得られるものにあたる。Millsは両者とそれ以上を含むものを感得力と呼び、それに注目しなければならないとする。調査実習においては専門教育で得られる社会調査の技法だけでなく、コミュニケーション能力や自己反省能力が教育効果として重要なのである。Millsはこうも主張する。「教育者は、たとえまったくつまらない安っぽいものと思われるものであっても最も深く個人の興味をひいているところから始めなければならない」。(49) 受講生個人の問いから調査を始める分離モデルを採用する調査実習はこうした感得力を育むものと考えることができる。

注

- (1) 社会調査士資格が制度化された背景には、質問紙調査の回収率の低下や必ずしも質の高くない調査の増加といった社会調査をめぐる厳しい状況があった。
- (2) 社会調査協会「社会調査士とは」
- (3) 小林「社会学と社会調査教育」p.53
- (4) 片桐「社会学教育の意義」p.447
- (5) 江原「激動期にある社会をとらえるために」
- (6) 「質的社会学分析」での取り組みについては、山口・中野・川口・今林『質的調査法を教える』において詳しく論じている。
- (7) 芦田哲郎によれば、標準カリキュラムのうち質的調査法に特化したのは1科目のみであり、量的調査法に関する科目との選択科目である。また社会学の教員数が少ない大学が本制度に参加することの困難もすでに指摘されている。芦田「社会調査士制度に関するフォーラム」p.77
- (8) 篠原・榎本・大矢根・清水『社会調査の基礎』、金井・渡邊・小林『社会調査の応用』
- (9) 日本社会学会社会学教育委員会がF科目の授業モデルを示している。日本社会学会社会学教育委員会『『質的な分析の方法に関する科目』の授業内容に関する調査報告書』
- (10) 長谷川美貴によれば、質的調査実習を行っている200ケースのうち、受講生個人が調査先を決定しているものものは68ケースである。ここから受講生個人より、教員がテーマや調査先を決定していることが多いことがわかる。長谷川「大学における質的調査法の授業の現状と課題」p.141
- (11) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」p.78
- (12) 中山「社会学教育改革のための基礎枠組みとしてのプロフェッション論」p.408
- (13) 中山「社会学教育改革のための基礎枠組みとしてのプロフェッション論」p.408
- (14) 大村「社会学教育における実習の意義」p.262
- (15) 社会調査士科目認定委員長をつとめていた天野正子は調査実習を必修化した理由として、社会調査科目の担当教員たちが調査実習の教育効果を高く評価していたからだとしている。天野・岡太

- 『社会調査実習』（G科目）の教育効果と課題」 p.97
- (16) 西城戸「社会調査教育の現状と課題」 p.23
- (17) 予期的社会化とはRobert K. Mertonのいう将来を見越した社会化である。それは所属したいと望んでいいるが、現在まだ所属していない準拠集団の価値を受容する個人にとって、その集団に所属することを助けるとともに、その一員となってから後の適応を容易にするものである。Merton『社会理論と社会構造』 p.242-3
- (18) 小城「聖心女子大学の『体育会系』社会調査実習」 p.86
- (19) 本田「東京大学教育学部比較教育社会学コースの『教育社会学調査実習』」 p.82
- (20) 社会調査協会「社会調査士とは」
- (21) 芦田「社会調査士制度に関するフォーラム」 p.77-79
- (22) 片桐「社会学教育の意義」 p.447
- (23) 江原「激動期にある社会をとらえるために」
- (24) 片瀬「情報化社会における市民的教養教育としての社会調査教育」 p.479
- (25) Mills『社会学的想像力』 p.6-7
- (26) Giddens『社会学』 p.20
- (27) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」 p.78
- (28) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」 p.78
- (29) 社会調査協会は社会調査士認定に関わる各科目について確認項目を示している。社会調査協会はG科目については、資格認定の申請において、担当教員に調査実習の授業内容を具体的かつ十分に説明すること、共通のテーマを設定した授業であることを求めている。ここでは社会調査協会は調査テーマを学生に任せるという説明を認めていない。社会調査協会「社会調査士科目認定に関わる確認項目」 p.3
- (30) 中山「社会学教育改革のための基礎枠組みとしてのプロフェッション論」 p.410-411
- (31) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」 p.80
- (32) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」 p.80
- (33) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」 p.80
- (34) 鈴木「リベラル・アーツとICUの教学改革」 p.40
- (35) 中山「社会学教育の疎外と再生」 p.220
- (36) Mills『社会学的想像力』 p.245
- (37) Mills『社会学的想像力』 p.245
- (38) 日比谷「自発的学修者の育成」 p.39
- (39) 市川「リベラル・アーツとこれからの大学教育」 p.32
- (40) 石橋「初学者を対象とした社会調査教育」 p.181
- (41) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」 p.78
- (42) 10種類の課題とは、(1)テーマの模索、(2)先行研究の探索、(3)先行研究リストの作成、(4)依頼状作成、(5)質問リストの作成、(6)先行研究リストの作成、(7)予備調査の実施、(8)トランスクリプトの作成、(9)中間報告用レジュメの作成、(10)調査計画書を指す。
- (43) 「質的 sociology 分析」で配布、活用している書類は次の通りである。(1)調査のための誓約書、(2)受講者の管理を行うための受講者票、(3)依頼状作成手続き、(4)依頼状、(5)調査に関するQ & A、

- (6) 学生に向けた調査インストラクション、(7) 調査管理カード、(8) トランスクリプションのルール、(9) 「質的社会学分析」で独自に定めた論文スタイルガイド これらはすべて山口・中野・川口・今林『質的調査法を教える』に所収されている。
- (44) 質問紙調査は2012年度「質的 sociology 分析II」の受講生に対して行った。回答者数はI・IIとも22名である。どちらも最終授業開始前に無記名の質問紙を配布し、授業終了後に回収した。質問項目は「インタビューについてどのような難しさがあったか」「グループワークについてどのような難しさがあったか」「分析についてどのような難しさがあったか」「授業の履修前と今で、社会学や社会調査に対する考え方が変わったか」「授業を通じてどのような能力を身につけたか」の5点であり、すべて自由記述である。
- (45) 伊奈・中村『社会学的想像力のために』p.232
- (46) 西澤「社会調査実習における躊躇と墮落」p.78
- (47) 江原「激動期にある社会をとらえるために」
- (48) Mills『社会学的想像力』p.245
- (49) Mills『社会学的想像力』p.245

参考文献

- 天野正子・岡太彬訓「『社会調査実習』（G科目）の教育効果と課題」『社会と調査』1号，2008年，96-99.
- 芦田哲郎「社会調査士制度に関するフォーラム」『フォーラム現代社会学』5号，2006年，77-79.
- 江原由美子「激動期にある社会をとらえるために——社会理論研究と社会調査教育」第82回日本社会学大会報告原稿，2009年.
- Giddens, Anthony, *Sociology*, Cambridge: Polity Press, 2006. (松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・立松隆介・内田健訳『社会学』東京：而立書房，2009年.)
- Goldsmid, Charles A. and Everett K. Wilson, *Passing on Sociology: The Teaching of a Discipline*, Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, 1980.
- 長谷川美貴「大学における質的調査法の授業の現状と課題——社会学系の実習・演習科目を中心に」『人間科学』27巻2号，2010年，139-145.
- 日比谷潤子「自発的学修者の育成」『大学時報』316号，2007年，36-39.
- 本田由紀「東京大学教育学部比較教育社会学コースの『教育社会学調査実習』——『神奈川県公立中学校の生徒と保護者の生活と意識に関する調査』（2009年度）を例として」『社会と調査』8号，2012年，82-85.
- 市川伸一「リベラル・アーツとこれからの大学教育」『大学時報』316号，2007年，32-35.
- 伊奈正人・中村好孝『社会学的想像力のために——歴史的特殊性の視点から』京都：世界思想社，2007年.
- 石橋潔「初学者を対象とした社会調査教育——久留米大学情報社会学科の取り組み」『久留米大学文学部紀要 情報社会学科編』3号，2007年，171-181.
- 金井雅之・渡邊大輔・小林盾『社会調査の応用——社会調査士E・G科目対応』東京：弘文堂，2012年.

- 片桐新自「社会学教育の意義——大学での学び方、活かし方」『社会学評論』58巻4号, 2008年, 437-455.
- 河口充勇「フィールドワークの教育効果」『同志社社会学研究』11号, 2007年, 67-79.
- 小林盾「社会学と社会調査教育——日本社会学会シンポジウムより」『社会と調査』4号, 2010年, 52-60.
- 小城英子「聖心女子大学の『体育会系』社会調査実習」『社会と調査』5号, 2010年, 82-86.
- Merton, Robert K., *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, New York: The Free Press, 1957. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』東京: みずぎ書房, 1961年)
- 中山伸樹「社会学教育の疎外と再生」東洋大学編『21世紀の国際社会における日本II——環境・文明・国際人教育・異文化理解・技術移転交流』, 1997年, 199-225.
- 中山伸樹「社会学教育改革のための基礎枠組みとしてのプロフェッション論」『社会学評論』58巻4号, 2007年, 395-414.
- 日本社会学会社会学教育委員会「『質的な分析の方法に関する科目』の授業内容に関する調査報告書」日本社会学会ホームページ, 2006年, <http://www.gakkai.ne.jp/jss/pdf/situteki.pdf> (2010年12月31日閲覧).
- 西城戸誠「社会調査教育の現状と課題——京都教育大学・社会調査実習の実践を事例として」『教育実践研究紀要』5号, 2005年, 21-31.
- 西澤晃彦「社会調査実習における躊躇と墮落——東洋大学社会学部での私の経験から」『社会と調査』3号, 2009年, 77-81.
- 大村好久「社会学教育における実習の意義——137人による89年度『社会調査』実習活動から」『武蔵大学人文学会雑誌』21巻3号, 1990年, 282-261.
- 盛山和夫「市民的教養としての社会調査教育の必要性」『新情報』97号, 2009年, 1-5.
- 社会調査協会「社会調査士とは」社会調査協会ホームページ, http://jasr.or.jp/participation/what_sr.html (2013年9月21日閲覧).
- 社会調査協会「社会調査士科目認定に関わる確認項目」社会調査協会ホームページ, 2013年4月1日, <http://jasr.or.jp/documents/b-1-0.pdf> (2013年11月17日閲覧).
- 篠原清夫・榎本環・大矢根淳・清水強志『社会調査の基礎——社会調査士A・B・C・D科目対応』東京: 弘文堂, 2010年.
- 鈴木典比古「リベラル・アーツとICUの教学改革」『IDE』486号, 2006年, 39-42.
- 山口富子・中野佑一・川口遼・今林寛之『質的調査法を教える——リベラル・アーツにおける社会調査教育の取り組み』東京: 国際基督教大学, 2013年.

**Social Research Education as Liberal Arts:
A Case Study of Educational Experiments in the Course “Qualitative
Analysis in Sociology” at International Christian University**

<Summary>

Yuichi Nakano
Ryo Kawaguchi

This paper argues for the possibility of “research-education separated model” in order to achieve better social research education.

In particular, firstly, we look at the current state of social research education under the Social Research Qualification System and confirm that “research-education integrated model” is now dominant in social research training classes. Secondly, we argue that “research-education integrated model” tends to focus mainly on knowledge and skills in social training, not on the sociological imagination, which is essential to sociology and social research. Thirdly, we examine the common ground between the sociological imagination and reflexive thinking about self and society, one of the goals of liberal arts. Fourthly, we deliberate possible ways of class management to enable a course model which separates education from research on the basis of our educational experiments in “Qualitative Analysis in Sociology” at International Christian University. Finally, we analyze the educational effect of this class on the students participating in the class. As a result, we reveal that there are three educational effects which are mutually related: the understanding of research process, the cultivation of social and communicational skills and the realization of sociological imagination.